

要 旨

本研究は、文章を正確に理解し、自分の思いを適切に表現することのできる児童を育成するために、文学的な文章の学習において、読む能力を高める指導の在り方を探ったものである。そのために教科書教材と別教材を用いた繰り返し学習と、既習の学習内容の視覚的提示の2つの手立てを取った。これらの手立てを取ることで、学習したことや語彙が身に付いていき、読んだことを基に、自分の考えをまとめることができるようになってきた。

〈キーワード〉 ①考えをまとめる ②繰り返し学習 ③ごくごくコーナー

1 研究の目標

文章を正確に理解し、自分の思いを適切に表現することのできる児童を育成するために、文学的な文章の学習において、読む能力を高める指導の在り方を探る。

2 目標設定の趣旨

平成20年3月に示された学習指導要領の国語科の目標では、「国語を適切に表現し正確に理解する能力を育成し、伝え合う力を高めるとともに、思考力や想像力及び言語感覚を養い、国語に対する関心を深め国語を尊重する態度を育てる」¹⁾とある。また、「日常生活に生きて働くよう、一人一人の児童が言語の主體的な使い手として、相手、目的や意図、場面や状況などに応じて適切に表現したり正確に理解したりする力」²⁾、すなわち言語能力を育成する大切さが示されている。

平成24年度佐賀県小・中学校学習状況調査及び全国学力・学習状況調査を活用した調査の結果概要報告によると、佐賀県の小学校では、主として「知識」に関するA問題の「読むこと」領域の「場面の様子や登場人物の気持ちを想像しながら音読する」が全国平均より低かった。また、主として「活用」に関するB問題の「読むこと」領域の「目的に応じ、雑誌や読んだ記事の特徴を捉える」「編集者の意図を捉える」「目的に応じ、記事を結び付けながら読む」「複数の記事を結び付けながら読み、事実を基にして自分の考えをもつ」が、全国平均より低かった。今年度本校で実施した標準学力調査(CRT)の結果から、本校の児童は、基礎的な内容についてはどの学年も目標値、全国平均正答率を上回っているか同程度であったが、活用の内容については、目標値、全国平均正答率を下回っている学年が見られた。このようなことから、「読むこと」領域の指導の中で、特に、基礎的・基本的な内容を生かして、それを活用させるための指導の在り方を考えていくことが重要であると考えます。

本校2年生の児童では、「スイミー」の教材文で物語のあらすじを書く活動を行い、その後別の物語文であらすじを書かせる単元を仕組んだ。「スイミー」では、あらすじを書くことができたが、別の物語文になると、自分の力で書くことができずにいる児童が見られた。書くことができずにいる児童は、登場人物の行動から物語の場面の様子を捉えることができずにいるようであった。このときに、教科書教材と別の教材をつなぐよりよい手立てを工夫すれば、「スイミー」で学習したことを生かして、自分の力であらすじを書くことができたのではないかと考えた。

そこで本研究では、研究テーマ、研究課題を受け、児童が学習したことを他の教材の内容の読みに生かし、自分の力で読み進めることができるようにするための方策を考えることとした。学習したことを整理して、他の文章を読む際に活用していく活動を行っていくことで、学習したことが身に付いていき、本や文章に書かれた内容を理解し意味付けることや、自分の目的や意図に応じて考えをまとめたり深めたりすることができる児童が育つと考え、本目標を設定した。

3 研究の仮説

文学的な文章の学習において、教科書教材と別教材の複数教材での繰り返し学習と、既習の学習内容を視覚的に提示し活用することで、読んだことを基に自分の考えをまとめることができるような児童になるであろう。

4 研究方法

- (1) 読む能力を高めるための指導に関する理論研究
- (2) 自分の考えをまとめるための手立ての考案
- (3) 所属校の2年生での授業実践及び検証

5 研究内容

- (1) 先行研究や文献などを基に、読む能力を高めるための指導の手立てを明らかにする。
- (2) 既習の学習内容を提示するコーナーの開発及び工夫を行う。
- (3) 所属校の2年生における「お手紙」(3時間)と「スーホの白い馬」(3時間)を用いた授業実践を行い、仮説を検証し、手立ての有効性を示す。

6 研究の実際

- (1) 文献等による理論研究

習得と活用について山元は、「基礎的・基本的な知識・技能を育成するための『習得』の学習は教師のモデル提示とサポートのもとに行われ……自ら学び自ら考える力を育成するための『探究』の学習は、学習者が実行することを教師が支え、見守るかたちで営まれるものである」³⁾と、段階に応じた学習形態の工夫を述べている。また、読む能力を身に付けさせるために、瀬川らは、学習の発展として教科書に掲載されている文学的な文章を学習した後、同シリーズの作品を読む場を設定し、学び方を生かした学習を通して人物の心の触れ合いをより深く捉えさせる授業実践を行い、複数教材を活用することの有効性を示している。さらに、文部科学省の「教科書の改善・充実に関する調査研究報告書(国語)」では、習得を図る上で、語彙を常時提示し活用することや、児童が自分で学習できるような手引きを作成するような工夫を盛り込むことを提案している。

これらの考えを受け、本研究では、文学的な文章の学習において、教科書にある文学的な文章(教科書教材)と、教科書教材とともに紹介されている文学的な文章(別教材)を用いて、それぞれを同じ学習過程で学習を進める繰り返し学習と、既習の学習内容や語彙を視覚的に提示するコーナーを、単元を通して取り入れていく。そうすることで、文章を正確に読み、読んだことを基に、文章の中から必要な言葉を書き抜き、自分の考えをまとめることができる児童を育成することができると考えた。

- (2) 研究の構想

ア 研究の全体構想

「読むこと」領域において、基礎的・基本的な内容を生かして、それを活用させるための指導の在り方を考えていくことが重要である。そこで、文学的な文章の学習において、自分の考えをまとめる力を高めるための過程を構想した。1つの単元の中に教科書教材を用いて、基礎的・基本的な内容を学ぶ場と、別教材を用いて、教科書教材で学習した基礎的・基本的な内容を活用する場を設定した。教科書教材、別教材共に同じ学習過程で学習を進めることで、指導事項を繰り返し学び、指導事項が身に付いていくと考えた。このような学習の進め方を、ここでは繰り返し学習とした。また、教科書教材で学習した指導事項や、自分の考えをまとめる手掛かりとなる語

彙を掲示するコーナーを設けた。このように、単元において、繰り返し学習と、既習の学習内容や語彙を提示するコーナーの設置を行っていくことで、文章を正確に読み、読んだことを基に、自分の考えをまとめる力が育成されると考えた(図1)。

イ 検証の視点と具体的な手立て

(ア) 【検証の視点Ⅰ】繰り返し学習を行ったことによる自分の考えをまとめる力の高まり

自分の考えをまとめるためには、文章を正確に読む必要がある。そこで、1つの単元の中で、教科書教材と別教材を用いて学習を進めた。まず、教科書教材を用いて、学習の手順や指導事項を学級全体で学習した。次に、別教材を用いて、教科書教材を用いて学習したことを活用し、児童が自らの力で学習を進めた。繰り返し学習では、教科書教材、別教材で用いるワークシートを工夫した。どちらも全く同一のワークシートで教科書教材と別教材を用いた学習を行うと、時間が掛かり、児童の意欲を損なう可能性もある。そこで、教科書教材のワークシートでは、場面ごとのワークシートを作成し、読み取り方を学ばせるようにした。また、別教材で用いるワークシートでは、児童に自力で取り組ませたい内容のみに絞り込み、ワークシートの枚数を減らした。さらに、別教材を用いた学習時間を、教科書教材を用いた学習時間よりも短くすることで、児童の負担を軽減し、学習したことを的確に活用することができるようにした。このような繰り返し学習を行うことにより、文章を正確に読み、それを基に自分の考えをまとめることができるようになると思った。

(イ) 【検証の視点Ⅱ】既習の学習内容や語彙を提示するコーナーを設けたことによる自分の考えをまとめる力の高まり

低学年の児童は、学習したことをすぐに身に付け、活用することが難しい。また、自分の考えをもっていても、何と表現してよいのか分からず、書いたり発表したりする際に時間がかかることがある。これは、児童の語彙量の少なさが原因の一つにあると考える。そこで、既習の学習内容と語彙を提示するコーナーを教室に設けた。このコーナーを、「ごくごくコーナー」と名付け、児童にも親しみがもてるようにした(図2)。「ごくごくコーナー」には、学習し分かったことを教師がまとめ掲示する「授業をごくごく」のコーナーと、言葉を意味によるまとまりごとに分類した「言葉をごくごく」のコーナーを設けた。「言葉をごくごく」のコーナーには、児童が言葉や文を書き込むことができるスペースを設け、休み時間を使って自由に書き込ませた。このようなコーナーを設けることにより、児童は既習の学習内容や語彙をいつでも確認し、活用することで既習の学習内容や語彙が身に付いていき、自分の考えをまとめる力が高まっていくと考えた。

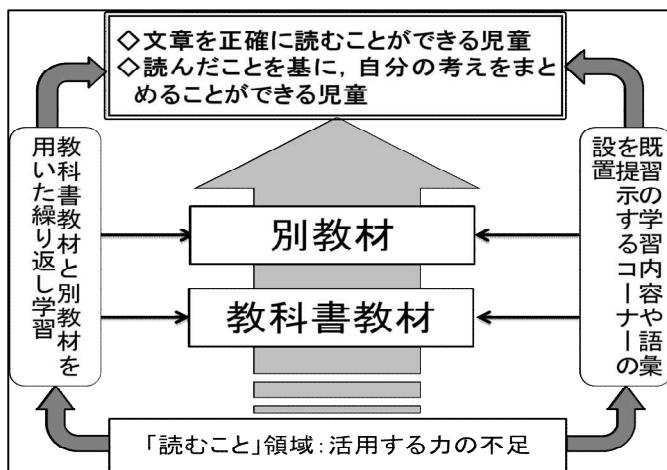


図1 全体構想図



図2 ごくごくコーナー

(3) 授業の実際

仮説の検証に当たって、第2学年において、検証授業①単元「2年生音読劇場をひらこう」(11月上旬～中旬)、検証授業②単元「お話を紹介しよう」(1月中旬～2月上旬)を検証授業として行った。ここからは、主に検証授業②単元「お話を紹介しよう」についての詳細を述べる。

ア 授業の概要

本単元では、場面の様子について、指導事項C(1)ウ・エ・オにあたる、登場人物の行動を中心に想像を広げながら読み、自分の感想の中心を捉える力を育成するために、紹介カードに紹介文を書く活動を言語活動として取り入れた。紹介カードは、あらすじ、心に残った文、心に残った理由の3項目でまとめさせた。

第1次では、まず、教師が作成した紹介カードを見せ、紹介カード作りに関心をもたせた。この紹介カードを3年生に紹介することを伝え、今後の学習の見通しをもたせた。第2次では、教科書教材「スーホの白い馬」を読み取り、紹介カードにまとめる活動を行った。始めに、場面ごとに登場人物の行動に着目させ、気持ちに迫らせた。その後、場面のあらすじを1文で書かせた。あらすじは、登場人物の様子や気持ちに着目させるため、主人公を主語にして書かせるようにした。また、場面ごとのあらすじは、紹介カード作成の際の材料になるようにした。次に、本文の中から心に残った文を選び、そこに線を引かせ、心に残った理由を書かせた。心に残った理由を書かせる際に、「ごくごくコーナー」の「言葉をごくごく」のコーナーを活用させた。第3次では、別教材を読み取り、紹介カードにまとめる活動を行った。場面ごとの読み取りや、あらすじをまとめる活動は、主に個人で学習を進めさせた。その際、「ごくごくコーナー」を自由に見に行くことができるようにし、自分の考えをまとめる際の手掛かりとさせた。また、自分が考えたことを確かめる場として、グループでの交流の時間を設けた。同じ本を読んでいる児童同士が集まって、それぞれの考えを聞き合うことで、自分の考えを確かめたり、修正をしたりすることができるようにした。第4次では、第3次で作成した紹介カードを基に、3年生に紹介する活動を行った。第5次では、単元全体を通しての振り返りの活動を行った。ここでは、単元を通して、分かったことやできるようになったこと、これからの学習に使えると思ったことなどを自由に記述させた。

イ 【検証の視点I】繰り返し学習を行ったことによる自分の考えをまとめる力の高まり

繰り返し学習を行ったことによる自分の考えをまとめる力の高まりについて、抽出児と学級全体を基に考察を行う。表1に3名の抽出児の「読むこと」領域の学習に関するプロフィールを記す。まず、抽出児が、教科書教材及び別教材で書いたあらすじを基に、自分の考えをまとめる力の高まりについて述べる。

表1 抽出児のプロフィール

A児	物語文を読んで、内容の大体を捉えることができる。物語文を読み、自分の考えを書くことが十分にできる。その際に用いることのできる感想を表す言葉は多い。
B児	物語文を何回も読むと、内容の大体を捉えることができる。物語文を読み、自分の考えを書くことができる。その際に用いることのできる感想を表す言葉は少ない。
C児	物語文を何回も読むと、内容の大体を捉えることができる。物語文を読み、自分の考えを書くことができるが、時間を要する。その際に用いることのできる感想を表す言葉は少ない。

表2 抽出児が書いたあらすじ

	教科書教材「スーホの白い馬」のあらすじ	別教材「ジェイミー・オルークとなぞのプーカ」のあらすじ
A児	<ul style="list-style-type: none"> ・スーホが白馬と出会いました。 ・しかし、殿様に白馬をとられ、スーホが悲しんでしまいました。 ・それから、<u>白馬は死んでしまいました。</u> 	<ul style="list-style-type: none"> ・始めに、ジェイミーが考え事をしていました。 ・次に、3人の友達と大宴会をして、部屋がちらかり、ジェイミーは片付けず寝ているとプーカというものが入ってきてあっという間に片付けてしまいました。 ・そして、ジェイミーがもっとプーカのことを知りたくなって、プーカに話しかけました。 ・最後に、ジェイミーがプーカに古いコートをあげて、プーカが何も片付けずに帰って行って、アイリーンに怒られます。
B児	<ul style="list-style-type: none"> ・スーホが何か白いものを抱き抱えて帰ってきた。 ・しかし、スーホが競馬に出て、白馬をとられ殺されてしまった。 ・最後に、スーホが白馬の毛や皮などで馬頭琴を作りました。 	<ul style="list-style-type: none"> ・はじめに、ジェイミーのおかみさんが、1週間くらい家にいなくて、何もなくなる。 ・次に、ジェイミーのところにプーカがやってきて、部屋を片付けた。 ・そして、ジェイミーが3人組のところにリング酒を持って行って、大宴会を開いた。 ・最後に、ジェイミーがプーカにコートをやって、プーカが片付けずに帰った。
C児	<ul style="list-style-type: none"> ・スーホが白馬をやさしく抱き抱えてきます。 ・スーホが競馬に来て、殿様から白馬をとられてしまったけど、白馬がスーホのところに帰ってきました。 ・スーホの白馬が死んでしまって、スーホは、眠れなかったけど、とうとう眠ってしまって、白馬の夢を見て夢からさめると、すぐに馬頭琴を作りました。 	<ul style="list-style-type: none"> ・始めに、ジェイミーは、アイリーンの出かける話を聞いている場面。 ・そして、ジェイミーのところに、プーカがやってきて部屋をプーカが片付けた場面。 ・次に、ジェイミーはプーカのことがもっと知りたくなって、プーカにしゃべった場面。 ・最後に、ジェイミーは、プーカの来るのを待っていて、プーカが来ると、コートをやって、プーカが掃除をしていかない場面。

あらすじを書くためには、文章を正確に理解し、それを基に必要な出来事を抜き出したり、まとめたりすることが必要である。これが、自分の考えをまとめる力につながると考える。ここでは、あらすじの中に、場面の中心となる出来事を抜き出したりまとめたりして書くことができているかを、抽出児の記述内容を基に分析を行った。教科書教材「スーホの白い馬」のあらすじをまとめる学習で、抽出児は、表2のように書いた。「スーホの白い馬」の最後の場面は、スーホが、死んだ白馬で馬頭琴を作り、いつまでも一緒にいられるようになる場面である。しかし、A児は、「白馬は、死んでしまいました」と、白馬が死んでしまったことのみを記述していた。抽出児以外の児童も、場面の中心となる出来事をあらすじに書いておらず、あらすじが十分でなかった。そこで、あらすじの書き方について学級全体で指導を行った。「スーホの白い馬」を用いて、中心となる出来事を入れたあらすじと、中心となる出来事を入れていないあらすじを提示し、どちらの方が分かりやすいかを問うた。すると、あらすじには中心となる出来事を入れた方が分かりやすいことに気付かせることができた。その後、A児は別教材の読み取りを行い、場面ごとの中心となる出来事を捉え、あらすじをまとめることができていた(表2)。B児、C児についても、教科書教材、別教材ともに、あらすじのまとめはおおむね満足できるものであった。中でも、別教材のあらすじについては、検証授業の観察から、A児、B児、C児ともに、自力でまとめることができていた。

次に、学級全体の児童の教科書教材、別教材で書いた心に残った理由の記述を基に、自分の考えをまとめる力の高まりについて述べていく。児童が心に残った理由をどのように述べているかを、教科書教材と別教材それぞれのワークシートの記述内容から分析し、比較した(次頁図3)。教科書教材では、「悲しいと思いました」、「悔しいと思いました」などの思ったことを中心に自分の考えをまとめている児童が多かった。それが、別教材では、「私だったら片付けてもらう」、「王は強くて自信がある」などの、自分が既にもっている知識や経験などと結び付けて解釈し、想像を広げたり理解を深めたりしてい

ることを基に自分の考えをまとめている児童や、「自分がそうしなきゃよかったと思っています」、「もっといい虎が王だと思いました」などの、読んだことを基に自分が考えたことを書き添えながら、自分の考えをまとめている児童が増えてきた。

このように、教科書教材の後に別教材を用いた学習を行うことで、児童は、学習したことを活用し、自分の考えをまとめることができるようになってきた。よって、繰り返し学習は、文章を正確に理解し、自分の考えをまとめる力を高めることに有効に働いたと考える。

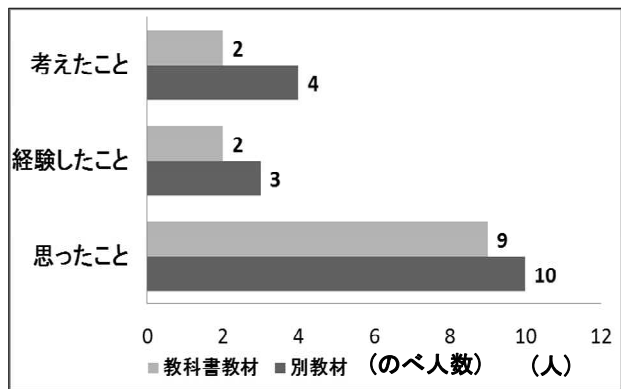


図3 心に残った理由に記述している内容 (16人)

ウ 【検証の視点Ⅱ】 既習の学習内容や語彙を提示するコーナーを設けたことによる自分の考えをまとめる力の高まり

検証授業①では、「言葉をごくごく」のコーナーを、気持ちを表す言葉、動きを表す言葉、名前を表す言葉に分類し、これらの言葉を児童や教師が書き込むことができるようにした。しかし、児童が書き込んだ言葉の中には、授業に活用できないものがあつた。そのため、「ごくごくコーナー」のどの言葉をどこで用いてよいのか分からずにいる児童がいた。そこで、検証授業②では、感想を書く活動で言葉を活用させるため、「言葉をごくごく」のコーナーに、感想を表す言葉のみを提示するようにした。また、授業で適切に言葉を活用させるために、感想を表す言葉は、教師が全て提示した(図4)。さらに、感想を表す言葉をどのように用いればよいのかを示すために、感想を表す言葉を用いた短文を書かせるコーナーを設けた(図5)。児童は、感想を表す言葉を用いて短文を書くことができた。



図4 検証授業②で使用したごくごくコーナーの一部

既習の学習内容や語彙を提示するコーナーを設けたことによる自分の考えをまとめる力の高まりについて、抽出児と学級全体を基に考察を行う。まず、抽出児が教科書教材、別教材で書いた心に残った理由を基に、自分の考えをまとめる力の高まりについて述べる。次頁表3は、抽出児が、教科書教材及び別教材で記述した心に残った文を選んだ理由である。読んだことを基に、心に残った文を選び、その文を選んだ理由を書かせた。B児は教科書教材「スーホの白い馬」において、スーホの気持ちに合う感想を表す言葉を「ごくごくコーナー」で探した。そして、コーナーの「がっかり」、「いっぱい」、「悔しい」、「つまらない」の言

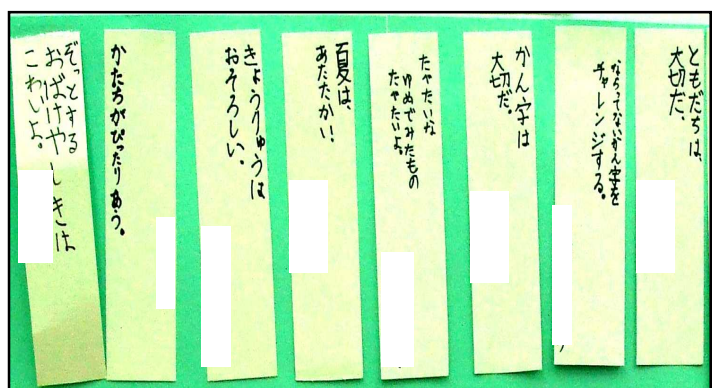


図5 児童が書いた感想を表す言葉を用いた短作文

表3 抽出児が書いた心に残った理由

	教科書教材「スーホの白い馬」の心に残った理由	別教材「ジェイミー・オルークとなぞのプーカ」の心に残った理由
A児	私は、「白馬はひどい傷をうけながら走って、走って、走りつづけて、大好きなスーホのところへ帰ってきたのです。」のところが心に残りました。	ジェイミーが、片付けしないで3人の友達と大宴会ばかりしていたので、その罰としてプーカが帰って行ったと思います。
B児	スーホは、白馬が死んだから <u>がっかりした</u> と思いました。スーホは、 <u>いっぱい悲しい</u> と思いました。白馬が死んで <u>悔しい</u> と思いました。白馬がいなくて <u>つまらない</u> と思いました。	<u>うれしそう</u> な声だったので、そこを選びました。この本の感想は、ジェイミーは本当に人の話を聞かないから嫌だと思いました。
C児	生まれたばかりの白馬を大切に抱きかかえてくるところが心に残りました。	ジェイミーがコートをやって、プーカは誰かが何かをくれるとプーカは新しい家に行くというところが、プーカが帰ってしまったので、「おいおい、まっとなおくれよ。」と言ったところが <u>おもしろい</u> と思いました。

葉を用いて、白馬が死んで深い悲しみの中にいるスーホの気持ちをまとめることができた。別教材でも、主人公のジェイミーの気持ちに合う言葉を「ごくごくコーナー」で探した。ここでは、「うれしい」の言葉を用いて、おかみさんが留守にすることを喜んでいるジェイミーの気持ちをまとめることができた。さらに、別教材では、「人の話を聞かないから嫌だと思いました」と、主人公に対する自分の考えも書きまとめることができた。また、A児、C児ともに、「ごくごくコーナー」へ行き、自分の考えをまとめるために、感想を表す言葉を探していた。C児は、別教材で心に残った理由をまとめる際に、「おもしろい」の言葉を用いていた。A児、C児ともに「ごくごくコーナー」の感想を表す言葉をほとんど用いてはいなかったが、検証授業での観察から、「ごくごくコーナー」の感想を表す言葉が、自分の考えに合う言葉を探るための手掛かりになったと考える。

次に、学級全体の様子を基に、自分の考えをまとめる力の高まりについて述べていく。児童は、「ごくごくコーナー」の言葉をヒントにすれば書くことができることを、検証授業①で既に経験していたため、すぐにコーナーの側へ行き、自分の考えに合う言葉を探していた(図6)。実際に児童が「ごくごくコーナー」の言葉を活用することができたのかについて、検証授業②の教科書教材、別教材それぞれのワークシートへの記述内容を基に分析を行った。すると、教科書教材、別教材のどちらの学習においても、ほとんどの児童が、「ごくごくコーナー」に提示していた感想を表す言葉を用いて心に残った理由を書いていた(図7)。



図6 ごくごくコーナーを活用している児童の様子

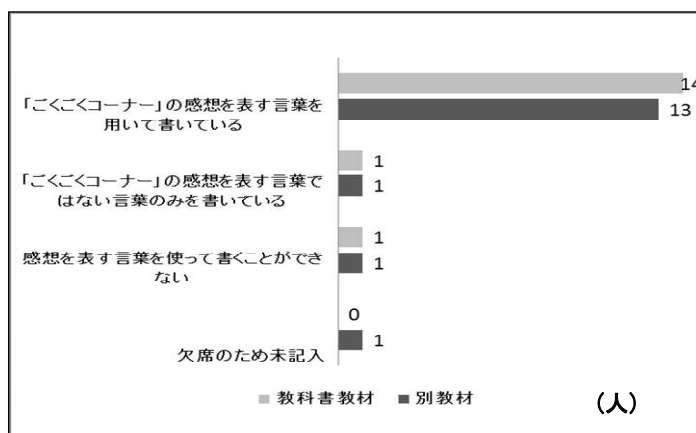


図7 「ごくごくコーナー」の言葉の活用 (16人)

このことから、児童にとって「ごくごくコーナー」が、自分の考えをまとめる際の手掛かりとなっていたと考える。

エ 学級全体の傾向にみる自分の考えをまとめる力の高まりについての考察

(ア) 実態調査に見る児童の変容

自分の考えをまとめるためには、文章を正確に読む力を身に付けていることが必要である。そこで、検証授業の前後において、「読むこと」領域の中でも文学的な文章についてのテスト結果を比較した(図8)。事前テストは、平成24年4月実施の標準学力調査(CRT)の「読むこと」領域の物語文を読む内容の結果である。事後テストは、事前テストと同程度の難易度の問題を作成し、平成25年2月に実施したものである。正答率を見ると、事前テストの74.1%から事後テストの92.2%へと伸びが見られた。また、全問正答の児童数の割合も38%(6人)から、75%(12人)へと増えており、ほとんどの児童が物語文の場面の様子を読み取ることができるようになってきていると考えられる。

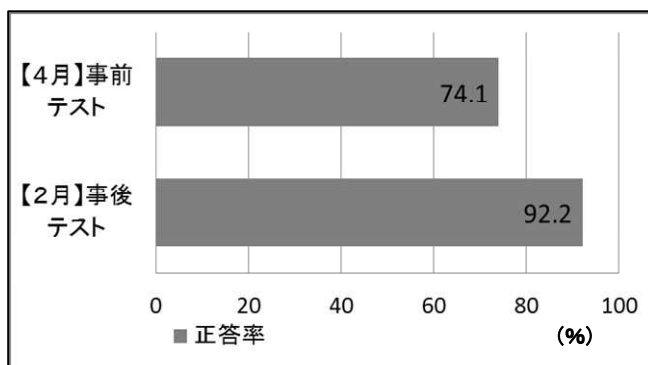


図8 事前テストと事後テストの比較

また、検証授業前(6月)と検証授業後(2月)における、児童のワークシートの記述から、自分の考えをまとめる力の高まりについて検証を行った。6月は登場人物についての感想、2月は心に残った文を選んだ理由について書かせる活動を行った。その際、感想を表す言葉をどれだけ使用したかを比較した(図9)。6月の単元では、児童一人一人が選んだ物語文について、登場人物の感想を書かせる活動を行ったところ、学級全体で9語の感想を表す言葉を使用していた。つまり、児童は、読んだ物語文は異なっても同じような表現で感想を書いていたことになる。2月の検証授業②では、2冊の物語文から好きな方を選び、心に残った理由を書かせたところ、学級全体で18語の感想を表す言葉を使用していた。使用している物語文の冊数は少なくなっても、言葉の数が増えていることから、児童一人一人が自分の考えに合う言葉を用いて書くことができるようになったと考える。

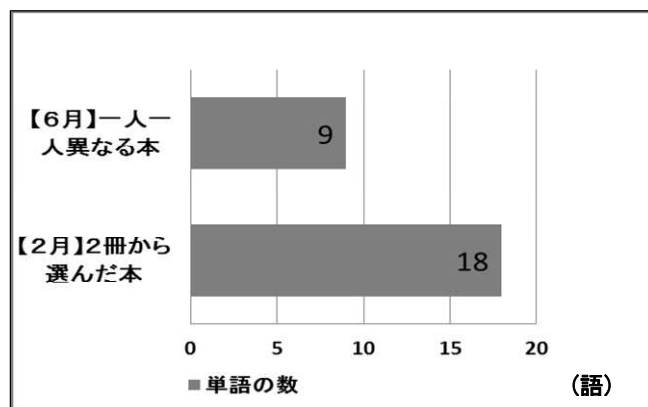


図9 感想を表す言葉の使用の比較

(イ) 意識調査の結果の考察

繰り返し学習と「ごくごくコーナー」に関する児童の意識の変容について、検証授業②の事前(1月)と事後(2月)に行ったアンケートと、単元の最後に行った振り返りの記述を基に述べる。まず、繰り返し学習については、全員の児童が、検証授業②の

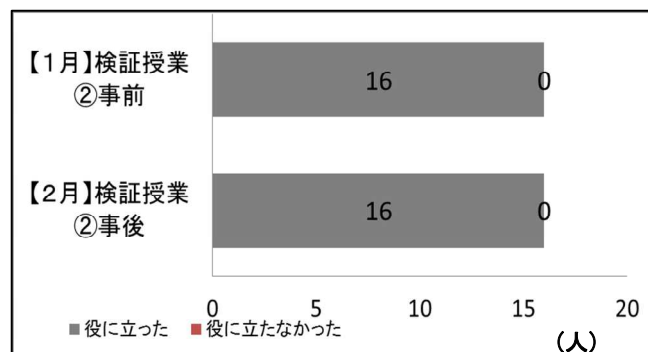


図10 繰り返し学習についての児童の意識について(16人)

事前、事後どちらにおいても、役に立ったと感じていた(前頁図10)。また、「ごくごくコーナー」について、検証授業②の前には、「ごくごくコーナー」が役に立たなかったと感じている児童が数人いた。しかし、検証授業②の後には、全員の児童が「ごくごくコーナー」が役に立ったと感じている(図11)。これは、授業実践①から検証授業②へ「ごくごくコーナー」の内容を焦点化したことによって、児童が活用しやすいコーナーになったと考えることができる。

また、単元最後の振り返りの記述から、繰り返し学習と「ごくごくコーナー」の有用性を明確に記述している児童の数を比較した(図12)。繰り返し学習と「ごくごくコーナー」の有用性を明記していた児童数は、検証授業①から検証授業②では、2倍以上増えている。児童の振り返りの記述を見ても、『ジェイミー・オルークとなぞのプーカ』の紹介カードを書く前に『スーホの白い馬』で勉強していたので、すぐに分かりました」と、繰り返し学習の有用性について明記していた(資料1)。また、「心に残った理由を書くときに、感想を表す言葉を使ったら簡単にできた」と「ごくごくコーナー」の有用性を明記していた(資料2)。

このように、アンケートの分析結果や、ワークシートの記述から、多くの児童が、繰り返し学習と「ごくごくコーナー」は、文学的な文章を読み取ったり、読んだことを基に自分の考えをまとめたりする際に、役に立ったと感じることができたと思われる。

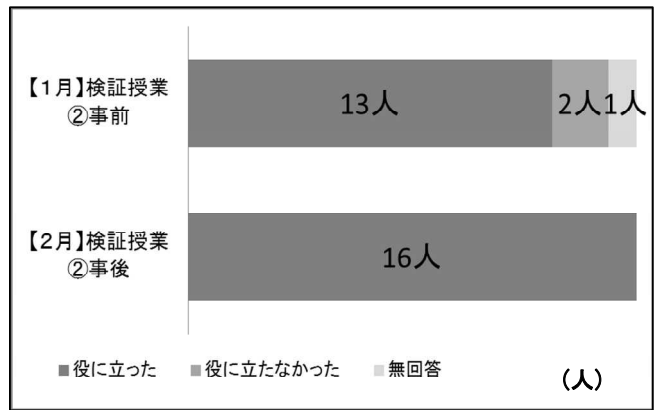


図 11 「ごくごくコーナー」についての意識の変容 (16人)

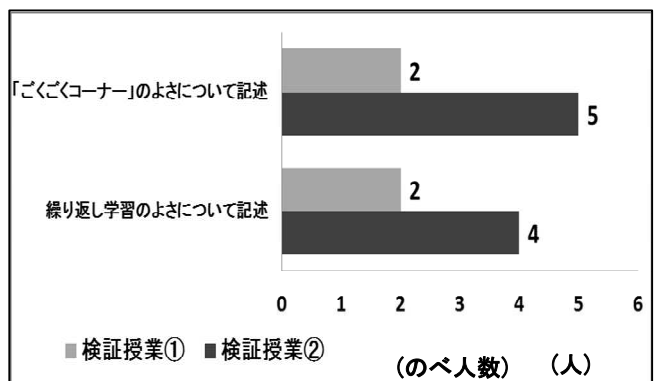


図 12 児童の記述にみる意識の変容 (16人)

わかったことは、ジェイミー
オルークとプーカのなぞ
のしょうかいするまえに
スーホの白馬でべんきょう
していたので、すぐにわか
りました。ぼくは、ジェイミ
ーオルークとプーカなぞのよ
うかい文ができたので
また、ちがいのなぞを
いけます。

資料 1 繰り返し学習についての児童の記述

三年生にしょう会をしたときドキ
したよ。ちょっとまわがえたけど、あんしょう
して、いえました。心のこたりゆう
さかくときに、かんそうをあらわすこ
とは、なかなかかんたんにはできな
から、プーカのべんきょうで、かいた
です。あんしょうして、いえて
よかったです。とおもいました。

資料 2 「ごくごくコーナー」についての児童の記述

7 研究のまとめと今後の課題

(1) 研究のまとめ

本研究では、文章を正確に理解し、自分の思いを適切に表現することのできる児童を育成するために、「読むこと」領域の文学的な文章の学習において、教科書教材と別教材を用いた繰り返し学習と、既習の学習内容や語彙を視覚的に提示し活用することができる「ごくごくコーナー」の設置による読む能力の高まりについて、検証を行った。

2つの授業実践を通して、繰り返し学習を行ったことで、教科書教材で学習したことを別教材ですぐに活用することができるため、別教材を用いた学習では、活動が停滞する児童がほとんどおらず、自力で活動を進めることができた。また、「ごくごくコーナー」において、既習内容や語彙を提示したことで、教科書教材で学習したことを確認したり、自分の考えに合う言葉を見付けたりすることが容易にできた。そのため、自分の力で考えをまとめることができたと考える。児童自身も、繰り返し学習や「ごくごくコーナー」の有用性を感じており、児童が意欲的に学習に取り組むための有効な手立てであったと言える。以上のことから、2つの手立てによって、文章を正確に理解し、自分の思いを適切に表現することができるようになってきたと考える。

(2) 今後の課題

- ・ 中学年、高学年でも活用できる繰り返し学習の工夫
- ・ 年間を通した「ごくごくコーナー」の作成

《引用文献》

- 1)2) 文部科学省 『小学校学習指導要領解説国語編』 平成20年8月 p.9
- 3) 日本国語教育学会 『豊かな言語活動が拓く国語単元学習の創造 I 理論編』 平成22年8月 東洋館出版社 p.147

《参考文献》

- ・ 瀬川 榮志編著 『複数教材活用による読みの授業改革』 1997年6月 明治図書出版
- ・ 文部科学省 『小学校学習指導要領解説国語編』 平成20年8月
- ・ 井上 一郎著 『「読解力」を伸ばす読書活動—カリキュラム作りと授業作り—』 2005年10月 明治図書出版

《参考資料》

- ・ 文部科学省 『教科書の改善・充実に関する調査研究報告書（国語）』 平成20年3月

《参考URL》

- ・ 国立教育政策研究所 『平成24年度 全国学力・学習状況調査 調査結果について』
<http://www.nier.go.jp/12chousakekkahoukoku/index.htm> (2012年8月)